

## 修 士 論 文 要 旨

看護学専攻	生涯看護学 分野 小児看護学 領域	学籍番号 217606 氏 名 坪谷 直樹
論文題目	子どもの手術後の痛みの訴えに対する看護師の認識	
キーワード	子ども 手術後 痛みの訴え 看護師 認識	
<p>《研究目的》 子どもは、認知機能や言語機能の発達も未熟な部分が多いため、子どもの訴える痛みは成人と比較しても正確に評価することが困難である。特に全身麻酔下での手術の場合、採血や静脈路の確保と異なり侵襲も大きく、痛みが持続しやすいことや入眠前や明け方にかけて痛みが強くなるといった日内変動がある。また、全身麻酔の影響での興奮や術前の処置などによる医療者への恐怖心も大きくなりやすいため子どもの訴える痛みを捉えることはより困難を極める。しかし、現状では子どもの手術後の痛みの訴えに対して看護師がどのように認識しているのかについては十分明らかにされていない。</p> <p>そこで今回、子どもの手術後の痛みの訴えに対する看護師の認識を明らかにすることを目的とした。</p> <p>《研究方法》 子どもの全身麻酔下での手術を受け入れており、研究協力への承諾が得られた医療施設より紹介された、小児看護経験年数3年以上かつ手術後の子どもの看護を実践してから1週間以内の看護師8名に、令和2年2月から5月にインタビューガイドに沿って半構成的面接を行った。子どもの年齢は、何らかの言葉で痛みを表現できるものとし3歳15歳までとした。分析方法は修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた。なお、本研究は三重県立看護大学研究倫理審査会の承認を得て実施した（通知番号194902）。</p> <p>《研究結果》 研究参加者は8名であり、小児看護経験年数は3年から8年であった。分析の結果3の[カテゴリー]、5の&lt;サブカテゴリー&gt;、23の【概念】が生成された。子どもの手術後の痛みの訴えに対する認識として看護師は、手術後は常に合併症や全身麻酔の影響といった[手術の侵襲による影響]を意識しており、手術後の子どもから言葉による何らかの痛みの訴えが聞かれても、その訴えを聞いただけでは本当に手術後の痛みがあるのかどうか自身の判断に確信が持てず[痛みの訴えに対する不確信さからくる迷い]がある状態であった。そして、その迷いを払拭し確信をもった判断を下すためにも、看護師は、【子どもがなぜ泣いているのか気になる】や【子どもが泣いているのか気になる】といった実際に痛みを訴えている子どもの様子や&lt;普段の子どもの様子との違いに目を向ける&gt;ことで子どもの何か違うに注目したり、普段の子どもの様子についてより詳しく把握したりするために【付き添い者への意図的な情報収集】といった[不確信さを確信へと変え迷いを払拭していく行動]を繰り返し行い、子どもの痛みの訴えに対して最終的な対応を決めるための判断につなげていた。</p> <p>《考察》 看護師は、痛みの訴えを判断するために普段の子どもの様子との違いに注目していた。特に子どもの泣くという行動を重視しており、泣くことを通して子どもなりに何かを伝えようとしていると考え、泣くが意味することを正確に捉えることが痛みの判断につながると考えていた。また、看護師は普段の様子との違いから痛みを捉えようと考えてはいるものの、入院中の子どもの様子しか把握できないことや子ども自身から情報収集し、普段の様子との違いを捉えることに困難さも感じており、子どものことをよく理解している付き添い者からの情報収集を重視していることが示唆された。そして、看護師が子どもの泣くや付き添い者からの情報収集を意識する一方で、子どもの泣くの意味を捉える能力や付き添い者からの意図的な情報収集を行う能力には個人差があることは否めず、看護師全員が同じように痛みの判断を行うことは困難な状況にあると考えられる。よって、看護師の子どもの痛みの訴えに対する対応力を高めるためにも定期的に痛みを訴える子どもの看護の経験を共有するような機会を設けるといった支援が必要であると考えられる。</p>		